

聖書 ヨブ記 23章 1-9、16-17節

最近のニュースの中で、気になっている話題があります。アメリカの中絶規制をめぐる動向です。近年、アメリカでは中絶に対する規制が厳しくなっていて、今年だけでも、全50州のうち47の州で、中絶制限を定めた何かしらの法律が導入されました。中でも激しい批判と論争の的となっているのは、先月9月1日に発効されたテキサス州の法律です。この法律のもとでは、胎児の心音が聞かれるようになる妊娠6週目以降の中絶が禁止され、実質的に中絶が全面違法化されているのです。しかも、当事者との関係に関わらず、誰でも、医者などの中絶に協力した人を訴えることができ、裁判で勝訴すれば、報奨金として1,000ドル(12万円ほど)が支払われるのです。アメリカでは、1973年に最高裁判決が出て以来、「妊娠を継続するか否かについての女性の決定」は、合衆国憲法上認められている人権とされてきました(Roe v. Wade, 410 U.S. 113)。テキサスで導入された法律は、その人権を無効化するものと考えられているのです。テキサスの法律をはじめとした中絶制限法に反対するため、三週間前の土曜日、10月2日、アメリカ各地で集会がもたれました。参加者は、「Bans Off Our Bodies」(わたしたちの身体を規制対象とするな!)と書かれたプラカードを掲げ、法規制反対と人権保障を訴えました。その土曜日の集会に先立つ木曜日、9月30日に、アメリカ議会の委員会で公聴会が開かれ、そこで、3名の女性議員が自身の経験を踏まえた証言を行いました。彼女たちは、若い頃にレイプの被害にあい妊娠し、中絶したときのことを伝えたのです。数十年を経て、当時の記憶をたどりながら、痛み、苦しみとともに紡ぎ出す生の声。彼女たちのそんな経験や声を無視するかのごとく、公共空間で画一的に法律として課される身体への抑圧と侵害。それに対してNoを突きつける姿。わたしは大きく揺さぶられました。彼女たちの思い、感情、決意。怒り。自分の意思に反して、誰か/どこか、自分ではないところに起因する何かしらの力によって、自分の生き方、価値、存在すら左右されていくことに対する怒り。そんな怒りについて、わたしたちは、ヨブ記から学ぶべきことがある、そう思うのです。

主人公は、ヨブという名の男性。1章2-3節「7人の息子と3人の娘があり、羊7千匹、らくだ3千頭、牛5百くびき、雌ろば5百頭の家畜を持ち、使用人も非常に多かった。彼は東の人々の中で最も大いなる人であった」。ちょーお金持ちな、大家族の長です。性格はどうかというと、これまた文句のつけようがない。「この人は完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている」(1:1, 1:8, 2:3)。このフレーズは、3度繰り返され、そのうちの2回は、神によって言われています。完全無欠、義の人ヨブ。そのヨブに、突然、最悪の事態が降りかかります。隣国の人たちに領地を襲われ、大火災が起こり、突風が吹き荒れ、所有していた土地、家畜、財産を全

て失い、さらには、子どもたちまでもみんな死んでしまいます(1:14-19)。追い討ちをかけるかのように、ヨブ自身も病気になり健康を害してしまいます(2:7-8)。次から次へと降り掛かる災難。それは、ヨブが信じている神によって引き起こされたものでした。義の人ヨブにとっては、全く身に覚えのないところで生じる、いわれのない災難の数々。初めのうち、ヨブは、神から与えられたものであるのならば、不満を言わずにすべて受け入れようとしていました。義の人としての模範解答です。ですが、時が経ても状況が改善されず、ヨブを慰めるために駆けつけた3人の友人たちを前にして、ヨブの態度は変わっていきます。まずは、「こんな苦しみを受けるのなら生まれてこなければよかった」と嘆きます(3章)。そして、友人たちが口を開けて語り出すと、ヨブのうちに怒りが沸き上がっていきます。4章から27章までは、神に従順な義の人ではなく、怒りに満ちた一人の人間として自分の思いの丈をぶつけるヨブと、友人たちとのやり取りが描かれています。全部で3クールあり、今日の箇所は3順目の始めの部分です。

議論のテーマは、「なぜ、正しく義の人であるヨブに、これほどまでの災難がふりかかったのか」。友人たちの主張はこうです。神は人の行いによってそれぞれに報いを与える。良い行いをする者には祝福を、悪い行いをする者には罰を。ヨブには災難が降りかかっている。ということは、ヨブが悪い行いをした、罪を犯したに違いない。仮に、ヨブが今までは罪を犯していないにしても、これからヨブが罪を犯すことのないように、警告として、神はヨブに災難を与えたのだ。ヨブがすべきことは、罪を悔い改めること、そして、神に従順であること。それによって、ヨブは再び、神からの祝福を受けることになる。今日の聖書箇所の直前で語っていたエリファズは、友人たちの中で、一番始めにヨブに語りかけた人物です。彼は、一貫してヨブを罪人と見なし、強情に罪を認めないヨブを、神を冒瀆する背教者のごとくに扱います(22:5)。そのエリファズに対するヨブの応答が展開されるのですが、ヨブは、直接に答えません。その前の二クールでは、ヨブは友人たちに直接答える形で語っていましたが、ここでは、エリファズのことを無視するかのように、自分の思いをぶちまけます。「神の前で、思う存分にわたしの言い分をぶつきたい。神なら分かってくれる。わたしには非がないのだ。自分は罪を犯していない。正しい行いをしてきたのだから。」

一見すると、エリファズに対してというより、神に対しての訴えです。ですが、内実はエリファズとその仲間たちに対しての不満と怒りに満ちています。「友人たちは分かってくれない。彼らと話をしても無駄だ。むしろ苦しみが増すだけだ。だから、この災難を引き起こした張本人、神にこそ、わたしは訴えたい。」着目すべきは、ヨブが、神に直接訴えることが不可能であることを自覚している点です。23章3、8-9節で、ヨブは「どこに行っても神に会うことができない」と語ります。さらに、13-14節では、たとえ出会えたとしても、神から望む答えを得ることはできない、と痛感しているのです(9:2-3も参照)。そうでありながら、なお、神に訴えることを強く願う。よほど、エリファズをはじめとする友人たちの応答に苦しめられたのでしょう。ヨブを苦しめ、ヨブの怒りを引き出したもの。最大の原因は、もちろん、災難

を引き起こした神にあり、怒りの矛先の一部が、神に向けられていることは事実です。ただ、友人との関係に焦点を当てると、ヨブは彼らの信仰の言葉に苦しめられたと言えます。ヨブの友人たちが強調するのは、宗教・民族の伝統、あるいは伝統に基づく社会通念。具体的な個人ではなく、平均化された人間が良しとするであろう宗教的・信仰的な「正しさ」です。エリファズは主張します。「あなたに告げよう。聞け。私が見たことを私は述べよう。それは知恵ある人が示し、その先祖が隠さなかったものだ。」(15:17-18. 参照 8:8 ビルダドの言葉)この言葉には、今、ここにある、ヨブ個人の経験、痛み、苦しみ、思いが、入り込む余地がありません。ヨブは、友人たちの宗教観、信仰理解を否定はしません。かつてはヨブも同じように考えていたからです。だけど、その考えでは通用しないことが自分の身に降りかかったとき、考えを変えざるを得なかった。今、ここに、現実の苦しみがある。痛みがある。生の経験がある。それをどう処理したらいいのか。自分の経験、苦しみ、痛みをなかったものにするにはできない。だから、怒る。最終的に、神が、一方でヨブの友人たちを批難し、他方でヨブを「正しく語った」と評価していることを踏まえれば(42:7-8)、ヨブの怒りの姿に見習うべきなのでしょう。

ただし、ヨブ記を含めて、神の言葉を綴っているとされる聖書が、歴史を通じてこれまでも、今でも、個人を抑圧し、差別を正当化する根拠とされてきたことを振り返るのなら、ここで留まるわけにはいきません。もっと深いところに目を向けないといけない。ヨブの限界を、ヨブが生きた時代、あるいはヨブ記を執筆した著者たちの時代の限界を、さらには、ヨブ記を受け取ったわたしたちを含めた後代の人たちの限界を露わにしなければなりません。それがなければ、「聖書」、「信仰」、「神の言葉」を盾にして、一方で差別是正を叫びながら、他方で知らず知らずのうちに、差別を助長する体制や制度を支える流れへとからめとられてしまう危険があるからです。ヨブは友人たちの主張する「宗教的・信仰的正しさ」に対して怒りを表しましたが、自分のうちにあるそれには目を向けることができませんでした。友人たちが訪れる前、ヨブの妻が語りかけています。その言葉が2章9節に記されていますが、ここで彼女は「宗教的・信仰的正しさ」ということからすれば、不正解といえる提案をヨブにしています。「あなたは、まだ完全であり続けるのですか。神を呪って、死んでしまいなさい」。その言葉に対し、ヨブは彼女を「愚か者」と呼び、提案を却下します。そして、ヨブは、「神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか」と、信仰的に正しいとされることこそを貫くべきだと主張するので、これ以降、ヨブの妻は口を閉じ、再び舞台に現れることはありません。

ヨブが宗教的正しさから抜けきれなかった理由。それは、父権思想に支えられた男性・家父長としての立ち位置です。ヨブは、自分自身が苦しむ者としての経験をしてもお、常に「助ける側」としての意識を持ち続けていました。地位ある尊敬されるべき者であり、逆の立場、助けられる者たちとは違うこと、異なる立ち位置にいることを誇りとさえしていたことが聖書の記述からは伺えます。29章12-17節、および30章1-8節には、ヨブのそんな男性としてのエリート思想が如実に現れています。社会の中で弱き立場にされてしまう人たちに対し、助けを与える役は喜

んでこなすけれども、その人たちがその立場に置かれてしまう構造や制度を変革しようとはしてはしない。ヨブだけではありません。男性優位、父権思想はヨブ記全体を通して垣間見られます。何より、本書で語っているのはほぼ男性、ヨブと友人たち。ヨブは先程見た通り、社会的地位もあり、裕福で、尊敬されている有力者です。その友人ということは、彼らもまたヨブと同様の地位と権力を有する者であったことでしょう。そんなヨブと友人たちとの語りの中で、女性、貧しい者、弱き者、身寄りのない子どもたちは、パターンリズムの枠に入れられ、常に、彼らに助けられるべき存在として扱われます。だから、ヨブの妻は、ヨブと共に財産を失い、子どもたちを失った当事者であるにも関わらず、声を発することを許されず、発したとしても、ピシヤリと口を封じられ、場面から追いやられるのです。

アメリカ議会の公聴会で証言した女性の一人、牧師でもある Cori Bush さんは、証言の終わりの部分で、次のように語っています。「これまでに中絶を選択し、これから選択しようとしているすべての黒人の女性たちと少女たちへ。恥ずべきことは何ともありません。わたしたちの住む社会が、わたしたちの愛と正義とを法律に反映させることに失敗したのです。だから、わたしたちは、より良いものを受けとるべきなのです。だから、わたしたちは望むのです。わたしたちにはその価値があるのです。」(私訳)¹わたしは、教会とは、人権侵害を見過ごし助長する場、抑圧を肯定する場、差別を産み出す場ではないと信じています。人権を擁護し、抑圧に対して No と言い、差別を是正する場であると信じています。被害を受けた人がいるのなら、安心して駆け込むことができ、一息つける場であり、その人たちと共に有形・無形の様々な差別の構造に反対の声をあげていくための場であると信じています。ですが、どうでしょう。教会は、社会の差別を糾弾し、人権を護っていくための場となっているのでしょうか。誰もが安心していられる場になっているのでしょうか。むしろ教会が差別を生産する場になってはいないのでしょうか。「信仰の正しさ・信仰の一致・信仰の純粋さ。」そんな言葉が高らかに語られ、家父長的・家族主義的な思想と相まって、差別の構造が二重にも三重にも張り巡らされているのだとしたら。被害者が声をあげることができず、加害者が語る声だけが響く環境になっているのだとしたら。個人の痛み、うめき、苦しみが、なきものにされてしまわないように。神という名をかりて、信仰的正しさを掲げて、家族の純粋さを名目にして、わたしたちの身体を、思いを、感情を、経験を、縛り付けるあらゆる力にからめとられることのないように。強制される不利益に対して、怒りをあらわにし、思いを共にしていく必要があるでしょう。わたしの怒り、あなたの怒り、あの人の怒り。一人一人の経験と思いが大切にされ、それぞれの声が響きあい、各々の命と存在が重んじられる共同体。それこそが神によって集められたわたしたちが築き上げる教会の姿なのだと思うのです。

¹ “‘We Demand Better’: Reps. Cori Bush, Pramila Jayapal & Babara Lee Share Their Own Abortion Stories,’ *Democracy Now Website* (<https://onl.tw/mJHMe36>, accessed 17 Oct. 2021)